紅椿の姫

天川時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅椿の姫

【Ｎコード】

Ｎ９２９３Ｅ

【作者名】

天川時雨

【あらすじ】

戦国の世、始末屋として生きる少女と或る日を境に、姿を消した幼なじみを探す、二人の青年の物語。【作中に登場する人物、団体はすべてフィクションです】（１月６日完結しました！）

一・　紅い影

「誰も――」

宵闇の中、小高い丘に立ち尽くしている若い男が二人、その内の片方、色黒の男が呟く。それにもう片方、肌の白い男は頷いて応じる。

そこには誰も居なかった。静寂という名の闇が“村であった場所”を包んでいた。ほんの半刻前まで確かに“村”であった、その場所を。

そこは紅(くれない)の舞台。吹き抜ける風は強かな鉄の香り。この場所で起こった惨劇を知る物言わぬ証人達は、折り重なるようにしてその舞台の上に伏していた。

「あいつが、あいつが殺ったのか――」

固い声で色黒の男が呟くと、色白の男は、あぁとだけ呟く。

「椿(つばき)が――本当にあいつなのか。朔乃(さくの)」

朔乃と呼ばれた色白の男は、苦悶の表情で頷いた。

「殺られた村人の傷は全て刀傷だった。しかもどれも一太刀で致命傷を負わせている。そして全ては宵の口から月が昇るまでの短時間で行われている。こんな芸当、あいつにしか無理だ。そうだろう、弥栄葉(やえは)」

確かに、と口の中で呟いて色黒の男、弥栄葉は苦く笑った。

「通り名のとおりだな」

「通り名」

朔乃が怪訝な顔をして聞き返す。

「お前知らねぇのか。紅(くれない)の姫、あいつの通り名だ」

「紅の、姫」

「朔乃、村の地面をよく見てみな」

朔乃は月明かりの中、目を凝らして村の地面を観察する。

「――ッ」

朔乃は言葉を失った。その土は、月明かりの中遠目で見ても赤黒い色をしていることがわかる。赤が土に染み着いている、そのようにしか見えない。
「長い黒髪、膝丈までの紅い艶やかな着物に足軽のような鎧姿。それに加え、あいつが殺った場所は必ずこうなるそうだ。紅い色はその後一年は消えない、とも言われている――そう言うことだ」
絶句する朔乃を見て、弥栄葉は乾いた笑いを漏らした。
「信じられねぇよな、椿がやったことだなんて。虫も殺せなかったような女なんだぜ」
「帰ろう」
朔乃はくるりと村に背を向けた。
「どうした、朔乃」
「見てられない。もう、苦しい」
朔乃の背中が微かに震える。
「でも朔乃、椿への手がかりはまだ何も――ッ」
弥栄葉は朔乃の震える肩を掴み、その手に少し力を込める。
「朔――」
「ちらつくんだ」
「え」
弥栄葉の、朔乃の肩を掴む力が緩んだ。
「あいつの、椿の顔が。あの日の、椿の顔が――目の前にちらついて、しょうがないんだ」
言った声はかすれていた。朔乃の華奢な身体が、更に小さくなったように見えた。
朔乃の様子に、弥栄葉は苦い顔をして一言、帰ると呟いた。
二人の男は、廃村に背を向け、闇の中へと消えていった。
――あの日、まだ幼かったあの日、三人の幼なじみの運命は先の見えない濃い闇の中に吸い込まれていった
戦国の世、荒れる世風の中での出来事だった。

二．それは鮮やかに、残酷に

森の奥、小さな滝のある池で、娘は身体を清めていた。自らの身体の表面から清らかな水の上に滑り出す鮮やかな緋色の帯を見ながら、娘は俯いた。

「綺麗……」

両手で帯をすくうと、微かに鉄の匂いがした。

「でも、私のは……きっと、こんな綺麗な色はしていないのだろうな」

――きっと、濁った罪人の血

娘は自嘲気味に笑うと、清らかな水に自らを沈めた。

瞼を閉じると、昨日の光景がまだ鮮やかに焼き付いていた。

逃げまどう人々の叫び、断末魔……

娘は水から顔を上げると、深く呼吸をした。

――生きている

身体の隅々にまで巡る森の澄んだ空気が、彼女にそう実感させる。

「――ッ」　ふと、手を見ると己の手が鮮やかな紅色をしているように見えた。しかしそれは一瞬のことで、瞬きを一つする間に元に戻っていた。

胸が激しく鼓動を打っている。恐怖のあまり呼吸が困難で、のどの奥がひゅーひゅーと音を立てる。

娘は元に戻った両手を乱暴に水に突っ込み、力任せに洗い擦った。

――バケモノ

脳裏に響く幼い声。

娘は手を止めると深くうなだれ、岸に置いてあった粗末な麻の衣を手に取り、静かにその場を後にした。

※※※

「見て、母さんっ。僕良いもの見つけたよ」
「どうした、蛍(けい)」
女は床から重い身体をゆっくりと起こし、はしゃぐ幼い我が子の手に握られた物を見る。
「蛍、どうしたんだい、それは――」
小さな手に握られていたのは、その手に収まりきらないほどたくさんの金銭――
「家の戸の前に置いてあったの。これで母さんのお薬が買えるね」
女は息子の手からそれを受け取ると、はっとした。金銭の鈍い色に混じる一片の鮮やかな紅。
――椿の、花びら
「母さん、どうしたの」
女は涙を流しながら、粗末な小窓の外に広がる鮮やかな青を見上げた。
「いいや、何でもないよ」

三．真夜中の城門――語――

小高い丘の上に、その城は建っていた。いや、城と言うにはそれはあまりに物々しいだろうか。優雅、荘厳と言うより粗野な武人を連想させるその建物は堅牢な要塞の体を成していた。

辺りは闇に呑まれていた。城を囲むいくらかの篝火だけが闇の中に頼りなく揺らめいている。

娘は薄く笑う。その笑みがどういう類のものかは判然としない。或いは、どこか冷めたそれは無意識のうちに漏れたものかもしれない。

――ざりっ

娘は城へと歩き出した。この時間、城の門守が二人であることは、情報として既に知っている。

「問題は、無い」

左手で腰の刀の柄頭に軽く触れた。

※※※

「隆（たか）さん、あれは何でしょうかね。」

最初にそれに気づいたのは、最近奉公に入ったばかりの若い新参の兵だった。

隆さんと呼ばれた中年の兵は、新参の若いのが指さした先に目を凝らす。しかしいくら注意してみても、そこにあるのは濃い闇だけである。

「何を言っているんだ坊主。何も無いではないか」

そんなははずは、と若いのは口ごもる。
「確かに緋色の何かが」
「顔を洗って来い。眠気があるから無いものを見るのだ」
「あっ」
「どうした」
「やっぱり」
「何なんだ。わからぬ。言うてみろ」
「見間違いなどではありませんでした」
「緋色か」「緋色です」
「どこに」
「前方に。こちらへ向かっています」
「見えぬ」
「見えませぬか。闇が濃ぅございますから。そのせいでございましょう」
「見えた」
「見えましたか」
「緋色だ」
「鮮やかな」
「あぁ。大層鮮やかな緋だ」
「こちらへ来ます。あぁ、篝火に照らされてなんと鮮やかな」
「女だ」
「はい。足軽の風体ではございますが、確かに女。いや、娘と言った方が正しいかと」
「狐狸妖怪の類だろうか」
「どうでございましょう。確かに妖艶ではございますが」
娘の顔がはっきりと見える程に近くに来たとき、二人は息を飲んだ。
娘は鮮やかな緋色の衣を纏っていた。裾は膝丈ほど。衣の上には足軽のそれのような簡易な黒い鎧を身につけ、腰に差した二本の刀はすらりと長い。結われていない長い黒髪が篝火に照らされて漆の

黒のように艶(つや)やかで美しかった。
「――紅の姫」
若いのがそう呟くと、娘は形のよい唇の端を少し上げて、微笑んだ。
「かの有名な紅の姫が我らが城に何用か」
中年の兵が槍を握る手に力を込めた。
「交渉に」
娘は笑みを湛えたまま言う。
「交渉」
「はい。高宮家が主、高宮龍巳(たかみやたつみ)様に河野忠友(こうのただとも)様より和解の御提案ございまして、お伝えしたく参上いたした次第。龍巳様に謁見願いたく存じます」
「文であれば預かろう」
「文はありませぬ。私の口から直接お耳に入れよとの仰せ故」
二人の兵は顔を見合わせる。娘の表情からは話の真偽は計れなかった。
「俺が聞くのでは駄目か」
若いのが少し困ったように言う。油断はできない。槍を握る手に嫌な汗がべたつく。
「おそれながら」
「あなたには悪いが城の中にそう簡単に素性のしれぬ者を入れるわけにはいかん」
できれば争いたくはない。噂に聞く彼女は、自分のような新参者ではとうてい適わない――
槍を持つ手にいっそう力を込める。込めてから彼は、それは自分の震えを悟られまいとする無意識の行為なのだと気づく。
目の前の娘は困ったように、しかし余裕の表情で綺麗に笑った。

四．真夜中の城門―転―

「やはり、なりませぬか」
「待て、今すぐ通せとはいささか無礼が過ぎるのでは。龍巳様にお伺いを立てる。暫し待たれよ」
　中年の兵は、門の脇にある門守の詰め所らしき小屋に向かって、おいと声を掛けた。すぐに中から若い男が現れる。眠っていたようで、目を擦りながらこちらへ駆けてくる。そして、駆けてきたのに事の次第を伝え、それをすぐに伝令に出す。
「ご迷惑を」
　娘は軽く頭を下げる。
「ときに、そちらの若いお方」
　若いのは、はいと応えながら一瞬肩を震わせた。
「私が恐くていらっしゃるか」
「へ」
「いや、先程からそのような目をしていらっしゃる故」　若いのは、己の恐怖心を見抜かれたのと、娘に畏怖している自分に気づいて顔を真っ赤にした。
「け、決してそのようなことはッ」
　娘は少し寂しそうに笑う。
「危害は加えませぬ。貴方方が私に何もしない限りは――」
　中年の兵は一瞬、娘の腰元に光る物を見た。それが、娘が刀の鯉口を既に切っているからであることを判断するのに、さほど時間は要らなかった。
「伏せろッ」
　中年の兵が叫びながら若いのの頭を抱えて地面に倒れ込むのと、娘が刀を抜いたのは、ほぼ同時だった。
　抜かれた刀は綺麗に半円を描くように右側に振り上げられた。篝火に刀が鈍く照らされる。

「なっ、何を」
――カラン
若いのの声を遮るように、乾いた音が辺りに響いた。
「どうやら、貴女にはお帰り頂かねばならないようだ」
言いながら、中年の兵はゆっくり立ち上がる。
「残念にございます」
娘は微笑んだまま、振り上げた刀をゆっくりと鞘に収める。
「貴方方の主君は、たいそう気の早いお方らしい。門の内にも入らぬうちに殺しにかかるとは」
そう言って娘は、先程乾いた音が聞こえた方に目をやった。一人訳が分からぬ若いのも、どうしたことだろうと娘の向いた方に目をやる。
「……矢」
娘の右側には、丁度真ん中で斬られた弓矢が一本、落ちていた。
「困った、このままでは帰られませぬ」
「通しかねる」
「ならば、こじ開けるまで」
「お引き取り願えぬか」
「仕事を放棄して帰る兵士がどこに居るのです」
中年の兵と娘の気迫に、若いのはしりもちをついたまま後ずさる。
「事を荒立てたくはなかったのだが。できれば穏便に済ませたかった」
娘がそう言って俯き、目を閉じた瞬間、塀の上から無数の矢が放たれたのを若いのは見た。
「危な――」

五．真夜中の城門―乱―

紅い閃光が走った。否、そのように見えた。
それは一瞬の出来事だった。無数の矢が放たれると同時に、娘は門に向かって走り出したのだ。先程伝令に出した男が閉め忘れたのであろう、大きな門の片隅に備え付けてある小さな戸が僅かに開いていて、そこに向かって娘は飛ぶように走る。
娘が戸をくぐろうかというすんでのところで、中年の兵が槍を構えて立ちふさがった。
娘は何の躊躇もなく刀を抜く。抜いた刀で槍の柄を断ち切り、一歩踏み込み返す刀で中年の兵の首筋に刃を滑らせた。
ぐにゃりと中年の兵の身体が力を失いずしゃっと音を立ててその場に崩れ落ちる。若いのは恐怖でその場から動けず、ただ目を見開いてその様子を凝視していた。
娘は一瞬若いのに微笑みかけて、戸を音もなく走り抜けていった。
若いのはしばらく呆然としていたが、ふと、自分が見つめるものに違和感を覚えた。
――血が
確かに刃筋が滑ったであろう中年の兵の首筋には、血どころか痣ひとつ見受けられなかった。
若いのはそろそろと倒れている中年の兵に四つん這いの状態で近づき、その肩を恐々揺すってみる。
「――隆、さん」
中年の兵の身体がびくんと震えた。
――峰打ちか
「あの人は」
若いのは呟いて、ただ呆然と娘の去った方を見つめていた。

※※※

「出合えぇぇぇっ」

城内にひっきりなしに響く声、声、声。甲冑や刀の擦れ合う鈍い音、男達の雄叫び、無数の断末魔――

娘はその中を顔色一つ変えずに、平然と走り抜ける。それはさながら紅い閃光のよう。手には既に血で濡れ、てらてらと篝火の光を鈍く反射するそれを握りしめる。向かってくる兵を娘は手に握るそれで鮮やかに、滑らかに斬り倒す。娘がそれを操る度に、朱色が舞う。そしてその朱は、娘の顔をどす黒い紅で染め上げてゆく。

走りながら、娘はにやりと薄く笑う。

――紅の姫とは、よく言ったものだ

娘は向かってくる人間を斬りながら、そんなことを思った。兵の振り上げる刀に、ちらりと映った己の姿はさながら血に飢えた修羅のようだった。歪んだ笑みを湛えた己の顔に、一瞬肌が粟立つ。

馬鹿でかい城に土足で踏み込み、障子やら襖やらを乱暴に蹴倒しながら進む。持っていた刀は、けっこうな人数を斬ったせいでだいぶ傷みが激しかった。それを走りながら鞘に収め、二本目をすらりと抜刀する。抜刀しながら、一人斬った。

早々に逃げたのか、さすがに女子供の姿は見当たらなかった。もとより、今回の命はこの城の君主を殺すこと。女子供に用はない。命令外だ。だから女子供が居ようと居まいと、娘には関係なかった。今回は君主一人を斬れば良い。

――甘かった。やはりこうなるか

君主一人を斬れば良いとは言うものの、向かってくる者はやはり斬らねばならぬ。斬らねばこちらがやられる。

――さっさと和解に応じてくれれば良かったのに

『和解に応じれば、危害を加えてはならぬ。応じぬと言うのなら頭

目を――斬れ。臆病者のあ奴のこと、応じるとも思えぬがな』
己の雇い主の、醜く笑った顔を思い出して娘は嘆息した。
城の内部、一際荘厳な装飾がしてある襖を無感情に切り裂いた先に、この城が主、高宮　龍巳は甲冑に身を包み、刀を抜刀し、立っていた。
――合戦に行くのでもあるまいに
室内で刀を振り回すとなれば、当然身軽な方が有利である。にもかかわらず、この男は重い甲冑など身につけ、何をしようと言うのだろう。娘は再び嘆息する。噂に聞く通りの臆病者だからなのだろうか、それとも死を前にする武士の最後の矜持なのだろうか。
「――どうでも、良いことだな」
娘は音もなく、速やかに己の任務をこなした。

六．真夜中の城門―寂―

東の空に、太陽が顔をのぞかせる。その光と微細な空気中の水滴の織りなす靄で、その小高い丘はまるで大海にぽつりと頼りなげに浮かぶ孤島のような体を成していた。孤島の上には要塞のような城が厳然と腰を据えている。その様はどこか異様で、見る者を不安にさせた。

「……生臭い」

城を見上げる二つの影の内片方――弥栄葉は呟いた。

「あぁ」

ともう一つの影――朔乃は静かに応じる。

「血生臭い」

弥栄葉は顔をしかめてその臭いを辿るように、城に向かって足を踏み出した。

「行こう、朔乃――」

※※※

門前には、二人の門守と思しき男が憔悴しきったように門に背を預けて座り込んでいた。

「何があった」

弥栄葉は若い兵の顔を覗き込んだ。

「緋色……」

「緋色――」

朔乃は、はっと小さく息を飲む。弥栄葉は堅い顔でそんな朔乃の

顔を見る。
「女か」
弥栄葉がそう問いかけると、隣に座り込んでいた中年の兵が大きく頷いた。
「姫だ。紅の……姫」
「椿――」
朔乃が悲痛な顔で女の、己の幼なじみの名を呟いた。
「弥栄葉…椿は、椿は――」
弥栄葉は大きく頷いた。
「――ここに、居た」
二人は一度、目の前にそびえる城門を見上げてから、その中へと足を踏み入れた。

※※※

酷い臭気がした。朝靄とともに辺りに立ち上るそれは、単純に血の臭いとは形容できないような……
――死臭
そう言った方が適当だろう。それは正に紛う事なき“死”の臭い。辺りには足下を埋め尽くすかのような、かつて“ヒトであった物たち”の山。そして、染め上げられた地面の紅――
中に入って数歩歩いた所で、朔乃は耐えきれず吐瀉した。
「朔乃、無理をするな。外で待っていろ」
朔乃は肩で息をしながら苦痛に歪む顔で弥栄葉に笑みを返す。
「大丈夫、俺は」
そうか、とだけ呟いて弥栄葉は小さく息をつく。

風に乗って、どこからかすすり泣きが聞こえる。
「誰か居るのか」
呟いて、弥栄葉は朔乃を支えながら、声のする方へと歩を進める。
泣き声は、城門を入ってすぐ左脇にある物置小屋から漏れているようだった。
がらりと戸を開け放つと、中で無数の影が蠢くのと共に、異様な熱気が溢れてきた。
「誰だ」
弥栄葉がそう問うと、中で影たちが小さく息をのむのがわかった。よく目を凝らしてみると、影は女子供、老人であることが見て取れた。大して大きくもない小屋に、一部の隙間もないほどに人間が押し込まれている。
「――助けて、殺さないで。お願い――」
そんな声がポツリ、ポツリと中から聞こえ始め、それも最後には啜り泣きにかわった。
「大丈夫だ。僕たちは敵ではない。落ち着いて。ここで、何があったのです」
朔乃が赤子をなだめるように声を掛ける。弥栄葉は隣で口をつぐむ。こういう役は、性格もそうだが、見た目にも優男な朔乃の方が適当なのを、弥栄葉は知っている。
ややあって、老人の一人が一語一語、紡ぎ出すように細々と語り出した。
「我が城が主、高宮龍巳様は、長い間隣国の河野と、己が領土を飲むか飲まれるかの争いを続けておいでであった。しかし最近では、我が軍は長年の戦いに疲弊し、兵の数も、数年前に比べれば激減してしまった。
元々、国力など有ってないような小国。龍巳様御自身も、戦いに疲れておられたようだった。しかし龍巳様は戦いをやめるわけにはいかなんだ。領土を簡単に空け渡してしまえば己の矜持がなくなる。そして龍巳様は何より、我々のことを心配しておいでだった。河野

は重税で悪名高い悪党、隣国の民は疲弊していると言う。だからだ。奴が抜け目のない悪党であることは長年の戦いで嫌と言うほど分かっているからこそ、龍巳様は和解などという都合の良すぎる話を警戒なさったのだ。そしてその話を携えて来たのは、あの紅の姫であった――」

二人は小さく息をのんだ。

「紅のは、龍巳様が和解に応じないと知るやいなや、城内に飛び込み――儂らは、龍巳様の命で早々にここに避難していたので無事であったが。龍巳様は、我が殿は無事であるのか。我が君主はいずこや」

「朔乃、行こう」

狂ったように君主の名を呼び続ける老人を背にして、二人は城の更に奥へと歩を進めた。

七．真夜中の城門―醜―（前書き）

今回はいつもより流血表現が多量に含まれていますので、苦手な方はご注意を…

七．真夜中の城門―醜―

その光景は、異様だった。
金箔をいたるところにあしらった、小さいながらも荘厳な部屋。普段は輝きを放っているであろうそれがやけにくすんで感じられるのは、天井や壁にへばりつく赤黒く変色した血糊のせい。
その畳の真ん中に、それはあった。
重々しい甲冑を身に纏い、うつ伏せの状態で倒れていた。生死を確認するまでもなく、それは誰が見ても明らかな死体であった。そう、“誰が見ても明らかな”。何故ならその死体には、
「――首が、無い」
「どうして――」
二人はそれぞれ顔をしかめた。
「どうして――」
もう一度、朔乃は泣きそうな顔をして苦く呟いた。
「椿、僕たちの椿が――本当に」
己の幼なじみが、男の首を片手に血まみれで歩いて行く姿を想像して、朔乃は頭を抱えてその場に座り込んだ。
「弥栄葉ぁ、椿は――違うよな、椿は――」
「――あァァァァァァァァァッ」
朔乃の言葉に耐えきれず、弥栄葉は絶叫した。ひとしきり叫び終えると、彼はその場にへたりと座り込んだ。
「帰ろう、弥栄葉」
朔乃の弱々しい呼びかけに、弥栄葉は力無く頷いた。

※※※

――何だこの様は
娘――椿は胸中でそう独白して、失笑した。
首を持ってこいと言うから、持ってきた。それなのにこの扱い。
自分に対する冒涜のつもりなのだろうか、と。
昨夜、城を一つ落とした。
斬って、
斬って、
斬って。
殺して、
殺して、
殺して。
彼女はあの時確かに、人を刈る修羅であった。血に飢えた、戦場に狂う修羅。
血にまみれたその姿、人を刈ったその足で、約束の首を持ち、己の束の間の主の待つ城へ戻った。
主、忠友の前に首を放り投げてやった。ごとりと転がる首を見て、忠友は下品な薄笑いを浮かべた。
『報酬は』
椿が言うと同時に、武装した男たちが現れ、私の首に、喉元に、刀の切っ先を向けた。そうして今に至る。
「もう一度言う。報酬は」
椿は嘆息しながら問うた。
「この仕打ちが報酬とでも言うつもりか」
「左様。永遠の休息、これに勝る物はなかろうて」
「下らん」
椿は嘲笑した。
「どうせならもう少し気の利いた物を用意しろ。下らなすぎて、吐き気がする」

忠友の顔が、一瞬ひきつる。
「紅の姫ともあろう者が喉元に切っ先を突きつけられて何を言う」
冷静に状況を分析する。敵は五人。内二人は椿の喉元に切っ先を向けている。後方には歩幅一歩程の距離に襖。残り三人は後方を除いて、三方を囲っている。今見えるのは五人だが、おそらく襖の裏にも少なくとも一人は控えていると考えて良いだろう。
――行ける
「甘く、見られたものだな」
椿は、左腰の刀と、懐の小太刀を同時に引き抜いた。
素早く後方に体を引きながら抜いた右手の刀で二つの切っ先を上に払い、逆手に持った左の小太刀を背後の襖へ突き立てる。襖の裏、何かに刺さった感触。切っ先を向けていた二人の男が更に一歩踏み込み、上に払われた刀をそのまま振り下ろしてくる。
――遅い
引き抜いた左手の小太刀を染めるは、鮮やかな朱。素早く右へ体を捌き右側の男の首筋に右手の刀を滑らせる。右側の男がその場に力なく崩れ落ちる。そうして小太刀でもう一人の男の刀を受けつつ、周りを囲んでいた三人の内一人が切りつけてくるのを、先ほど男を斬った刀を振り下ろした下段の状態から刃の向きを変えてそのまま斜め上へと振り上げ、男の胴体へと滑らせる。
次に小太刀で受けていた刀を払い、先ほどと同じように右に体を捌き、刃を振り下ろす。
一瞬だった。瞬きをする間さえ有っただろうか。
後の二人を、椿は鮮血を浴びた修羅の顔で見据えた。二人は動くことを躊躇しているようだった。
「何もしなければ、殺しはしない」
子供に言い聞かせるようにゆっくり、力強く言うと、二人の男はひどく緩慢な動作で刀を下ろした。
刀を下ろすのを確認すると、椿は顔の強ばった忠友をひたと見据えた。

粘着質な鉄の匂いが、つんと鼻を突く。
「報酬を、よこせ」
――己が、酷く惨めに感じた。

八．華想い、懺悔

「おばさんッ」
床に伏したまま、女は声のする方へ首を回した。
「――弥栄葉の坊やかい」
坊やはひどいなと苦笑いを浮かべながら、声の主、弥栄葉は敷居を跨ぐ。
「おばさん、具合は――」
どうかと聞こうとして、はたとある物に視線が止まる。
「おばさんそれ、どうしたの」
あァ、これかい。と言いながら、女は枕元のそれを手に取る。
白い紙包みだ。いやに値が張りそうなその紙からは、何だか苦い香りがする。
「薬、蛍が買ってきてくれたのよ」
「買ってきてくれたって……」
薬なんて、と弥栄葉は思う。薬はとても高価で、農民に買えるような代物ではない。しかも見る限り、この包みは城下町の大棚、海遷屋（いせんや）のもの。
蛍が買ってきたと言う。ならば金の出所はいったいどこだ。
「――紅い椿がね」
置いてあるのよ、と言いながら女は嬉しそうに笑む。弥栄葉は意味がわからなくて顔を僅かにしかめる。
「決まって満月の夜に。戸の前に金銭と一緒に」
私はね、と女は薬を持つ手を見ていた顔を上げる。
「椿じゃァないかと思ってるの」
弥栄葉は瞠目した。
「椿、が……」
そんな顔しないでと女は笑う。
「一度手放したとは言え、娘だもの。椿だと信じたいだけなの」

身勝手が過ぎるねと言いながら、女はうなだれた。
「おばさん――」
「私は後悔してる。どうしてあの小さな身体をこの胸に引き寄せなかったのか、どうしてあの子を理解しようとしなかったのか――」
弥栄葉は言葉が見つからず、ただ黙って女の言葉に耳を傾ける。
「蛍はね、あの子は知らないでしょう、椿のこと。椿が居なくなったのは、あなた達がまだ五つの頃――もう十四年も前のことだものね。姉が居るという事実を、私はまだ蛍に伝えられないで居る。私はこの家からあの子の存在を実質消してしまったの。私と夫の記憶の中だけの存在にしてしまったのよ」
弥栄葉は、そんな言い方と言い掛けて、女にいいのよと制される。
「あの子は生きているのかしら。今、いったい何処で、何をしているのかしら…」
そう言って儚く笑う女の横顔から、弥栄葉は目を逸らした。
昨日見た光景が頭をかすめる。一面に紅黒く染まった地面、小さな一室、首のない亡骸――
咄嗟に口を押さえる。胸がむかついて、酷く吐き気がする。そんな弥栄葉を見て、女は心配そうに声をかける。それに片手を挙げるだけの返事をして、その場に座り込む。
「兄ちゃん、どうしたの」
開け放たれたままだった戸口から、蛍が慌てた様子で飛び込んできて、弥栄葉の背中をさする。
少しすると、次第に苦しさが和らいできた。
「もう大丈夫だ。ありがとう、蛍」
なおも心配そうな表情を浮かべた蛍に、弥栄葉は出来るだけ柔らかく笑んだ。蛍の顔が少し安堵の色を見せる。
本当に大丈夫かと聞いてくる女に、大丈夫だと笑みを返す。そして、返しながら、思う。
あなたの娘は、今――
事実を告げるべきか否かと問われれば、告げるべきではないのだ

ろうと、弥栄葉は思う。あの事実を受け入れるために、椿を闇から助け出すために苦しむのは、俺と朔乃だけでいい。

弥栄葉は小窓から僅かに覗く青空を見やる。何の汚れもない空の青さを、少しだけ羨ましく思った。

間幕―通り雨―

食料は尽きかけていた。さすがにもう調達に行かねばなるまい。なんとも物寂しい小さな調理場を見て、椿は嘆息した。

小さな窓から、外に拵えられた小さな畑に無残に枯れる植物を眺めながら独りごちる。

「農民の出、のはずなんだがなぁ」

じっと己の手を見て苦笑した。

あまり人の多いところには出たくはないのだが、このままでは飢え死には避けられない。観念したように髪を結い、質素な着物を身に着け、口元から首の辺りまでを白い布で覆った。見た目には少し訳ありの旅の浪人の体裁。

がらりと戸を開け、足を踏み出す。

思わず顔をしかめる。久々に見る昼間の世界は、あまりにも眩しかった。

※※※

町は丁度市が開催されていて、それなりに賑わっていた。

まずは米、次に日持ちする野菜、後は蝋に布…と優先順位を付けつつ己が駆って来た馬を引きながら町中を歩く。

「蝋は」

どこで売っていたかとぼそりと呟く。

「蝋ならこの先を真っ直ぐ行って左手に見える、鶴屋と言うお棚で買うと良い」

その声に、弾かれたように顔を上げる。酷く緩慢な動作で背後に目を向ける。

――弥栄葉

そこには、籠を背負った、日に焼けて快活そうな青年が、己の幼なじみが立っていた。

「――ッ」

青年の名を呼んでしまいそうなのを慌てて飲み込む。

「鶴屋、だな。ありがとう」

どう致しまして、と青年は柔らかく笑む。

――気づかれてはいけない

弥栄葉を背に歩き出しながら、自分に言い聞かせる。

もう、関わってはいけない。弥栄葉とは住む世界が違うのだ。

無意識に唇を噛む。馬を引く手に力が籠もる。馬が小さく嘶(いなな)いた。

あの日から、全ては始まったのだ。私たちがまだ無垢な子供だったあの日から。

そんなことを鬱々と考えながら歩いていると、鶴屋と書かれた大きな看板が目に入った。

※※※

蝋は買った。他の必要品も買った。買ったは良いが、

「何だ、この雨は」

先ほどまで晴れていたのが嘘のような強い雨脚。荷が無ければ馬を駆って帰るところだが、さすがに米を濡らすことは出来ない。よって、仕方なく近くの旅籠(はたご)で雨宿りと言う訳である。

薦められる茶菓子や茶をやんわりと断って、代わりに水の入った

桶と手拭いを借りて、人気のない隅の方ので、埃と泥塗れの脚を丁寧に拭った。
「あれ、また会ったな」
からりとした快活な声。
「お前は」
己の脚から視線を上げると、そこには予想通りの人物が人懐っこい笑みを浮かべて立っていた。
「雨宿りかい、お兄さん」
「あぁ」
「じゃぁ、俺と同じだ」
そう言って弥栄葉は隣に、どかっと腰を下ろした。
無意識にため息をつくと、辛気くさいなァと言って彼は笑った。
「雨は嫌いかい」
そう聞いてくるので、出来るだけ不機嫌さを装って嫌いだと答える。すると、何故かと問うてきた。
「嫌いな物は、嫌いだ。理由も何も無い」
「俺はなかなか好きだけどなァ、雨」
外に目をやりながら、彼は少し残念そうに呟いた。
「何故だ」
隣に座る彼の横顔を見ながら、無意識に問うていた。その問いに、彼はニヤリと笑ってこちらを見る。
「好きな物は好きだ。理由も何も無い」
「その通りだ」
私たちは、どちらともなく笑っていた。
「なァ、お兄さん。椿、と言う女を知らないか」
弥栄葉のその言葉に、一瞬にして笑いが引く。
「見たところアンタは旅の人だろう」
弥栄葉の問いから逃げるように、まだ降り続く雨を見た。
「紅の、姫」
「え」

「お前の探している女だ。通称、紅の姫。生業は始末屋。彼女の仕事の後は地面、建物至る所が血の紅に染まる」
言ってから、呆然とする弥栄葉に笑みを向ける。
「裏の世界じゃぁ有名だ」
「アンタ、椿に――」
「無いよ」
弥栄葉が言い終わる前に遮る。
「残念ながら、私は噂にその女のことを聞いただけだ。でも、これだけは言っておく」
言葉を置いて、弥栄葉の眼を見据える。
「――関わるな。死にたくなければ」
弥栄葉が何か言おうと唇を僅かに開いたが、私はそれをまた遮った。
「彼女がお前にとって何なのか、それは知らん。しかし彼女はもう、裏の人間だ。関わって良いことなど有りはしない」
私のこの言葉に、弥栄葉は――微笑した。
「ありがとう」
そう言って彼は、今度はしっかりと笑った。
「そんなこと聞かされちゃぁなァ。益々探しに行かなくちゃぁいけなくなったよ」
「お前ッ、私の話を」
「俺は何と言われようが、アイツを探す覚悟はとっくの昔にできてンだ。アイツは俺にとって……」
弥栄葉は再び視線を店の表へと移した。
「おっ、雨が上がってらぁ」
そう言うと、彼は立ち上がった。
「じゃぁな、お兄さん」
そう言って表へと歩いて行く後ろ姿をぼんやりと見送る。頭の片隅で、もう一人の自分が彼に全てを話してしまえと叫ぶのに、私は耳を塞いだ。

この日以降、私は弥栄葉に会ってはいない。ただ、私が仕事をした後の地に、二人の若い男が現れるようになったことを風の噂に聞くようになったのは、丁度この翌日からである。

九．記憶の海―序―

雨が粗末な屋根を打つ音が、一層激しくなる。
椿は堅い床に仰向けになって、天井を眺めていた。雨はどうも苦手だ。気分が滅入ってしょうがない。
――雨は全てを洗い流してくれる
頭の中に、ふとそんな言葉が浮かぶ。あァ、そんなことを言うやつも居たかと、少し笑って眼を閉じる――――

※※※

目が覚めると、そこには見知らぬ男が居た。状況が理解できない。確かに私は昨日、母（かあ）さまと一緒に寝たはずだ。
私が一人であたふたしていると、男は無言で飯の入ったお椀をこちらに突き出した。食え、と言うことなのだろう。腹は空いている、これ以上無いくらいに。しかし見るからに怪しいこの男が、何か毒を盛っている可能も無いではない。そんな事を考えながらぼんやりと突き出された飯を眺めていた。食べたい。本音を言えば、食べたい。だって昨日から何も口にしていないのだから。耐えろ、耐えるんだ、私。
「ほぅ、なかなか賢い童っぱだな」
その言葉にきょとんとしていると、男はにっと笑って見せた。結構若いのかもしれない、ぼんやりとそんなことを思う。
「食え、安心しろ。何も盛っちゃあいない」
「……」

そう言われても、怪しいものは怪しいわけで。つい手を出したくなるのをこらえながら、私はお椀の中の飯を睨み付ける。睨み付けていると、急に男の手が私の視界から飯を連れ去ってしまった。
「あ」
男はお椀の飯を食べだした。私は泣きそうな顔でそれを見る。どうやら話は本当であったらしいと悟り、激しく後悔する。
「ほら、大丈夫だろ。そんな顔すんな、まだ飯はある。さぁ、食えよ」
言って置かれたお椀に、私は飛びつくようにして飯を口の中に掻き込んだ。男がそれを見て笑っているらしかったが、そんな事はこの際関係なかった。私は一心に飯を貪った。
「そんなに急くな、飯は逃げん。時に小僧、名は何と言う」
私は手を止め、男を睨む。
「……こぞう、ではない」
「えッ、お前、女か」
男が目を見開くのに対して、私は首を縦に振る。確かに私は髪を短くしているけれど、れっきとした女だ。小僧と呼ばれるなど、心外だ。
「つばき」
「え――」
「わたしのな《・》」
男はそうか、とだけ言って無邪気な笑顔を見せるて、私の頭をわしわしと撫でた。
「俺は神夜（かなや）」
「……かなや」
「今日からお前は俺の弟子だ」
「……で、し」
私が小声で呟くと、彼は嬉しそうにまた私の頭をわしわしと撫でた。そのせいで髪がぐしゃぐしゃに乱れた。
彼の笑顔を見ながら、私は頭の片隅で自分は売られたのだと確信

した。その思考は驚くほど冷静で、客観的だった。生家の金銭状況を考えれば、何ら不思議なことではない。余所の村では家族全員が食べられるだけの食い扶持が無くて、山に捨てられる子供も居ると言う。自分はそうならなかっただけマシだと思う。

「かなや、わたしは……ここでなにをすればいい」

問うた瞬間、頭を撫でていた手がぴたりと止まった。

「お前、聞かないのか。自分がどういう状況に居るのか」

神夜の驚きとも哀れみとも取れぬ真っ直ぐな瞳を見返す。

「わかっている。だからいわない」

神夜は寂しそうに笑って、私を抱きしめた。神夜の体温が心地良くて、私は目を閉じた。抱きしめられるのなんて、久しぶりだ。父さまや母さまは田の世話や他の仕事で忙しかったから、帰ってきてぐったりと眠るばかりで、話す暇さえ満足に無かった。

「お前がそう言うのなら、俺は何も言わない。でも、今から俺が言うことをよぅく聞いてくれ。お前はこれから俺と伴に」

神夜は私を自信の身体から優しく離すと、私の眼を真正面からひたと見据えた。

「“人を殺す仕事”をするんだ」

真剣な顔の神夜に、私は少し微笑む。神夜のきょとんとした顔が面白い。

「いいよ、おしごと……わたし、なにをすればいい」

この人について行こう、そう思った。何故だか、神夜は自分を捨てはしないと確信している自分が居る。

痛みを堪えるような彼の顔が、少し悲しかった。

十．記憶の海―波―

まず始めたのは、食べることだった。

第一に神夜は私に“毎日三食たべること”を課した。神夜に言わせれば私は“細っこい”らしく、細っこくては仕事にならないのだそうだ。最初こそ、急にしっかり栄養のある食事を取り始めたものだから身体がそれを受け付けず、膳の半分以上を残していたが、最近では残す量も大分減った。以前の生活では、食べ物を残すと言う行為は決して許されることではなかった。お椀に米粒一つでも残そうものなら必ず両親から叱責されたし、近所の人からは白い目で見られた。だからここに来て最初に取った食事も、大分無理をして食べた。無理だと訴える自らの身体を気力で黙らせ、喉につっかえる飯を水で流し込んだ。

案の定、その夜床につくと、耐え難い吐き気が襲ってきた。私は神夜が寝入るのを見計らって、外の空気を吸いにそっと表に出た。しかし表に出た瞬間、私は耐えきれずくさむらに駆け込み、吐瀉した。真っ青な顔をして中に戻ると、神夜は全てお見通しだったらしく、明かりを灯し、上半身を起こした状態で私を待っていて、その姿を見て私は咄嗟に身を硬くした。

――打たれる

反射的にそう思ったのは、神夜の右手が挙がるのが見えたから。私はこれから来るであろう痛みに備えて歯を食いしばり、ぎゅっと目をつむった。だから不意に訪れた頭上の柔らかい感覚に拍子抜けした。　恐る恐る目を開けて神夜を見上げると、彼は私の頭を撫でながら一言、ごめんなと呟いた。

「俺がしっかり食べろなんて言ったから、無理させちまったんだな」

「……」

私は何故神夜が謝るのか解らなかった。

心底申し訳なさそうな顔をした彼に、ふわりと抱きしめられる。

「苦しかったろう。無理しなくて良いんだ。ゆっくり馴らしていこうな」
彼の言葉に、私はゆっくり頷いた。そしてそのまま目を閉じた。神夜の体温が暖かくて心地良かった。
その日から一月を、私は食事を取ることと、軽い運動をすることだけに費やした。運動と言っても、近くの山の中をひたすら歩いたり神夜と長い木の枝で剣技のまねごとをして遊ぶ程度だ。それでもしっかり必要な栄養を吸収した身体は、思った以上に丈夫になった。
身体が出来てくると、今度は実際に人と戦う術を教わるようになった。体術、剣術、更に火薬や種子島の使い方まで神夜は事細かに教えてくれた。
私が学ばねばならなかったのは、戦闘の術だけではなかった。山中の食べられる植物、茸の見分け方、更に薬草学の知識、文字の読み書き、作物の育て方、異国の兵法書など、神夜が私に教えてくれたことは全て頭に叩き込んだ。
私は飲み込みの早いほうであるらしく、実技、学問ともにそつなくこなした。学ぶことがひたすら楽しかったのだ。ただ、作物を育てることに関しては例外で、何度種をまき試行錯誤を繰り返しても、これだけはどうしても失敗してしまうのだった。
「誰にだって苦手なものはあるさ」
神夜はそう言ってくれたが、私は申し訳ないやら悔しいやらで、ひたすら農業関係の書物を神夜の書棚から引っ張り出しては読みふけっていた。
その頃、私はある匂いに頭を悩ませていた。
その匂いは、決まって神夜が仕事から帰ってきた時に彼から染み出しているようだった。禍々しい。その言葉がしっくりくるようなそれは、神夜が仕事で家を空ける日数が多ければ多いほど濃くなった。
――頭が、痛い
ある日私は、ついに匂いに耐えきれなくなり、神夜に問うた。こ

れは何の匂いかと。
「――これは……死の匂い。たくさんの人の、俺が奪った命の分だけ浴びた、血の匂い」
答えた彼は、今にも泣きそうな顔をしていた。
――あぁ、そうか
私はやけに冷めた頭で、神夜の言葉を聞いていた。
――私がやろうとしていることは、こういうことなんだ

十一・記憶の海―深―

十四になる頃には、私はもう神夜に着いて戦場に赴くようになっていた。

もう匂いに頭を悩ませることはなかった。ただ、己の胸に言いしれぬ虚脱感が巣くっていたこともまた事実だ。それでも己の心を失わないで居られたのは、神夜のおかげに他ならなかった。

その日も私と神夜は、ある城を闇に紛れて遠巻きに観察していた。

「なぁ、神夜」

私は声を潜めるでもなく、普段通りに神夜に話しかける。

「今日はやめよう」

私は返答を待たずして、精悍な横顔に懇願するように声をかけた。

この頃、神夜は二十四になっていた。

「なぁ、神夜――」

返ってきた答えは短かった。

「駄目だ」

その言葉に、一瞬瞠目する。

「何故だ。今日はこれから雨が降る。視界が悪ければ、こちらが不利になることは目に見えているじゃぁないか。それに今日は――嫌な感じがして、ならないんだ」

言って俯く私にちらりと目をやって、神夜は私の頭の上にその大きな手を置いた。そしてその手で私の髪を撫でるようにすくった。

私の髪は、もう腰に届くほどに長かった。

「椿――」

呟いて、神夜は優しく微笑む。とても今から人を殺しに行く人間の顔には見えなかった。

「今日しかないんだ。昨日の戦で兵が疲弊し、手負って、警護も手薄になっている今日しか。あの城の兵はかなりの手練ればかりだと聞いているからな。こんなときでないと、さすがの俺でも危ないよ」

「でも」
「大丈夫、心配ない。椿――」
呼ばれて、ゆっくり顔を上げる。上げた瞬間、唇に暖かいものを感じて目を丸くする。
「――ッ」
神夜の顔が離れていくのを見て、やっと今己の身に起こったことを理解した。
呆然とする私を、神夜は優しく抱きしめた。
「これが終わったら、一緒になろう」
確かに私は嫁に行ってもおかしくはない歳だけれど、突然のことに思考がついて行かない。嬉しくない訳がなかった。自分には神夜しか居なかったから。五歳で出会った時から、神夜が私の世界の全てだったから。
自然と涙がこぼれた。
「――何故今なんだ。神夜のせいで、涙がとまらないじゃないか。これじゃぁ、仕事にならない」
神夜は私の涙がとまるまでそのままで居てくれた。
辺りが闇に沈み、城門を照らす篝火の朱(あか)が一層鮮やかになった頃、私たちは歩き出した。足音を消すでもなく、堂々と、城門の前まで、ゆっくりと。
「ここを通してもらいたいのだが」

――その晩、ある小さな城が一つ、落ちた

十二・記憶の海―狂―

空が低く唸る。ぽつりぽつりと降り出した雨は、やがてまとまった豪雨となった。ぐしゃぐしゃにかき乱された泥に、足を取られる。

視界が悪い。戦っている相手の顔など、見えるはずもなかった。ほとんどその気配や殺気を頼りに、極力かわす。出来るだけ相手を斬らないでいたかった。そんな甘い考えは捨てなければならないと、解っている。生き残りが居れば、いつ己を打ちに来るか解らない。

それでも――と思う。

一人斬る度に、己の人間的な部分を切り捨てている気がして、恐くなる。いつか、血に狂う、戦場に狂う修羅になってしまうのではないかと、恐怖の波に呑まれそうになる。

――結局己のことばかりじゃぁないか

生暖かい朱色を浴びながら、自嘲した。もしかすると、もうすでに、私は人ではないのかもしれない。

「椿ッ」

雨と敵兵の中に、城の奥に走る神夜の背中が見えた。

「神夜ッ――」

名を呼び、心得たことを伝える。

――一気に片を付ける気だ

奥に行くと言うことは、大将を討ち取りに行くと言うこと。

神夜の後に着いて走り抜ける。彼の通った後には、私と屍しかなかった。

途中、逃げ遅れたのだろう、小さな子供を抱いた煌びやかな衣を纏った女が視界の端に映った。

――斬らなければ

そう思い、一瞬足を止めた。しかし、一瞬の後、私はまた走り出した。自身も恐くてたまらないはずなのに、強い眼差しを私に向けてくる女を、私は斬ることができなかった。

値が張りそうな内装を泥で汚しながら、私達は目的の部屋へ辿り着いた。
一瞬顔を見合わせて、その襖に顔を向けるその刹那に、一気に斬り込む。
手に鈍い感覚がして、見ると、襖の側に控えていた男二人が倒れていた。
神夜は敵将の前に控えているもう二人の男など、まるでその場に居ないかのように、ひたと敵将だけを見つめた。
「さるお方の命につき、貴男を斬らねばならぬ。許せとは言わぬが、恨むなら俺に命を下したあの方をお恨み願いたい」
言いながら神夜は、持っていた刀の露を払い、鞘に収めた。そうして、すらりと二本目の刀を抜刀する。
「……清川か」
敵将が、低く唸るように問うと、神夜は軽く頷いて肯定の意を示した。
「なるほど、清川からも儂は怨まれておったか」　敵は自嘲気味に呟いた。
「解った。ならばお前たちを恨むことはするまい。しかしな」
二人の男が徐々に間合いを詰めてくる。
「生きて帰すわけにはいくまいて」
二人の男が斬り私達に斬りかかって来た。しかし、その動きは私達にとってあまりにも遅すぎた。
必死の形相で上段に振りかぶって向かってきた相手に、私は慌てることなく、刀を中段の構えから低く一歩前に踏み込むことで、丁度喉元に狙いを定めて突いた。
朱色が舞う。
神夜を見ると、彼の方も勝負は一瞬であったようだった。足下には、先程まで人であったものが倒れていた。
敵将に目をやると、彼はニヤリと笑った。笑って、懐からおもむろに小太刀を取り出す。

「戦の中ではなく、やっと帰ってきたこの場所でこれを使うことになろうとはな」
「侍の道ってやつかい」
「そのようなものだな」
神夜が言うと、敵将はがははと豪快に笑い声を上げながら言った。
不意に、笑い声が途切れる。見ると、敵は自らの腹に、自らの手で、深々と小太刀を突き立てていた。
それを見て、神夜は　倒れゆく敵の首筋に刀を滑らかに滑らせた。
「帰ろう、椿」
答える代わりに、私は刀を鞘に収めた。
神夜の顔が、酷く悲しそうだった。

十三・記憶の海―別―

それは一瞬の出来事だった。
後一歩で、城門から外に出ると言うところ。
雨の降りしきる中、神夜がゆっくりと膝をつくのが見える。神夜は己の胸を貫く刃に手を触れ、呆然と、べっとりと手のひらを濡らす紅い液体を見つめている。
彼の後ろに影が見えた。私は無意識に抜刀し、その影を斬り捨てた。斬り捨てたそれは、べしゃりと音を立てて地面に崩れる。
それはあのときの女だった。強い目をして、己の子を守っていた、あの女。
――ゆるさない
事切れる直前、女の口がそう告げた気がした。
地面に伏せるように倒れる神夜をそっと膝の上に抱き起こす。
「神夜ッ……」
呼吸が荒い。降り続く雨が彼の体温を容赦なく奪ってゆくのが腹立たしかった。
「神夜、しっかりしろ。目を開けろ」
言うと、彼は薄く目を開いた。
「神――」
「――泣くなよ」
言われて、己が泣いていたことに気づく。
「ごめんな……一緒に、帰れそうに、ない」
「喋るな。私が医者のところまで連れて行くからッ」
言った声は、叫び声に近かった。
「神夜言っただろう。これが終わったら夫婦(めおと)になるんだろうッ。私には」
無意識に叫んだその声は、どうしようもなく震えていた。
「私には、神夜しか居ないんだ……」

呟くように言ったその掠れた言葉に、神夜は儚げに微笑んだ。
「そんな顔、するな……」
神夜はそう言って、震える右手私の頬に添えた。私は涙が止まらなかった。
「雨は嫌いだ……だって、神夜の顔が、よく見えない――」
――そうして、私の前から神夜を奪い去ってしまいそうだから
「……俺は……好きだけどな、雨。汚いものをすべて……洗い流してくれる、そんな気が……する……」
神夜の呼吸が徐々に弱まってゆくのが解る。私は彼を失うのが恐くて、彼をぎゅっと抱きしめた。
「なぁ椿、俺の罪も――この雨は、流して……くれる、だろうか」
耳元で神夜の泣きそうな声が聞こえる。
「あぁ、きっと。きっと流してくれる。だから――」
抱きしめながら、確実に弱ってゆく彼にそう告げる。
「――いかないでくれ、私を置いて、いかないでくれ。お願いだから――」
微かに神夜が笑った。
「椿」
ふつりと、神夜の言葉が途切れる。
「神、夜」
神夜の顔は微笑んでいた。しかし、目は閉じられたままだった。
「神夜、神夜、神夜ッ」
何度も何度も彼の名を呼んだ。もう優しく応えてくれる、あの愛しい声は聞けないのだと解っていて、それでも私は彼の名を呼び続けた。
「あァァァァァァァッ」
雨の音に混じる私の絶叫は、洗い流されるようにして掻き消えた。

※※※

はっと我に返る。
どうやら、深く記憶の中に浸りすぎたようだと苦笑する。
窓から光が差していた。いつの間にか、雨は上がっていたらしい。
私は草鞋(わらじ)をつっかけて、表へ出た。雨上がり特有の澄んだ空気が気持ち良い。
見慣れた小屋周りの森の中を突っ切ってゆくと、長い石段の上に佇む、小さな寺が見えてきた。
見えてきた石段の上に、一人の老いた僧が立っていた。この寺の和尚、永斎だった。私は石段を登り、永斎に無言で頭を下げる。
「そろそろ来る頃ではないかと思うてな、暇つぶしついでに待って居った。儂の勘も、まだまだ捨てたものではないわいのぉ」
永斎は好好(こうこう)と笑う。
「お出迎え、傷み入る」
「なに、堅くなるな。早く奴に会いに行ってやれ」
私は軽く頷いて、寺の奥、墓地の片隅にある、小さな墓石の前まで駆けて行く。そして、その墓前で手を合わせた。
「神夜」
あの後私は、雨の中、もう動かなくなった神夜を背負って夜通し歩き、咄嗟に頭に浮かんだこの寺に駆け込んだ。寺の門前に神夜を背負ったまま倒れ込む私を見て、永斎は、一切の事情を聞かず、中に上げてくれたのだった。
震える唇で神夜を救って欲しいとだけ伝えた。永斎はそれで全てを悟ってくれたようだった。小僧に神夜の濡れた身体を拭かせると、経を上げ、丁寧に埋葬してくれた。
永斎は今も私たちの行いについては何も知らないし、聞いてくることもない。

「神夜、どうすればいい。今でも私は貴男を」
――こんなにも想い、慕っている
「私の心は、貴男の側に」
青空の下呟くのは、あの日言えなかった言葉。
「愛している」
柔らかい日差しが、暖かかった。

間幕―華想―

「はァ」

床に着いたまま、僕はもう何度目か解らないため息をついた。

虚ろな目で開け放たれた戸口の向こう側を見れば、日はまだ高く、外に響く子供特有の甲高い笑い声が不思議に心地よい。

こんなに心地よい陽気の中、仕事をすることも叶わず伏せって居る自分に嫌気が差して、目を閉じる。

幼少の頃から人一倍身体が弱く、外で遊ぶよりも伏せって居た日の方が多い。故に肌の色は村の女子(おなご)よりも白い。

幸い風邪を引くばかりで、大きな病にかかったことはなかったので、貧しく薬が買えずとも何とか生きながらえてこられた。

「朔(さく)兄」

聞き慣れた幼い声に瞼を開ければ、うっすら額に汗したあどけない笑顔。

「どうした、蛍(けい)」

まだ頭痛がするが、できる限り柔らかいく微笑む。僕にとって蛍は、椿の弟だと言う以上に愛しい存在だ。人の心を暖かく照らしてくれる、蛍は僕にとってそんな子だった。

蛍は、ふふッと笑って両の手に持った何かを僕の目の前に突き出した。瞬間、苦い匂いが鼻を突く。

「蛍、これは…」

僕は目を見張った。何故ならそれは、紛れもなく城下の大棚で扱われている高直な薬の包みだったから。

「つばきのひと《・・・・・・》から貰ったの」

「つばきのひと《・・・・・・》」

言って僕は眉をひそめる。

「いつもね、夜の内にお銭と紅い椿の花を、最近はお薬も僕の家の戸の前に置いて行ってくれるの」

だから“つばきのひと”と呼ぶのだと、蛍は笑った。
「母様が朔兄にも持って行ってあげなさいって。その方が“つばきのひと”も喜ぶんだって」
蛍の言葉に、僕は息を呑んだ。
――椿がこの村に来ている
そう確信した。そしておばさんもそれに気づいている。
「朔兄、どうしたの」
「いいや、何でもない。ありがとうな、蛍」
重い身体を起こし、蛍の頭を撫でる。蛍は少し照れくさそうに笑った。
「朔乃、起きてるか」
表から快活そうな声と伴に、それに見合った日によく焼けた顔が覗いた。
「あぁ、弥栄葉」
弥栄葉は蛍を見ると、外で遊んでくるよう促す。
「朔乃、俺、椿のことを知っている人に会った」
明るい陽の中に駆けてゆく蛍の後ろ姿を見ながら、弥栄葉はぽつりと呟くように言った。
僕はそれを聞いて、軽く目を閉じる。浮かんでくるのは、幼き日の幼なじみの顔。
ゆっくりと瞼を開き、弥栄葉の目を見つめる。
「――僕も、椿のことを聞いたよ」
翌日から僕達は――

十四．絆―今―

「なァ、朔乃」
「ん、何、弥栄葉」
僕と弥栄葉は河原にいた。椿を追って訪れた戦場跡で体を壊してから数日、熱もようやく引き、やっと外を歩けるまでに回復したので弥栄葉が気晴らしにと仕事の合間を縫って散歩に連れ出してくれたのだった。
「あれ」
言った弥栄葉の視線を辿れば、その先には河原の対岸、少し切り立ったところに、鮮やかな紅い椿の花が見事に咲き誇っていた。
――あぁ、そんな季節か
そんなことを思いながら隣の幼なじみの顔を見ると、悲しそうな、嬉しそうな、懐かしそうな、そんな何とも言えない表情をしていた。きっと椿のことを思い出しているのだろう。あの娘は、自分と同じ名のあの花が、特に冬の灰色の中に咲く、鮮やかな紅いあの花がとても好きだったから。
「椿、どこに居るんだろうね」
僕がそう問うと、弥栄葉は紅い花から目を離すことなく、さァなとだけ答えた。
そのまましばらく僕たちは、対岸に咲く、鮮やかな紅を見ていた。
「朔乃、お前覚えてるか。椿との約束」
視線はそのままに、弥栄葉がそうぽつりと漏らした。
僕は弥栄葉の横顔を見ながら眉を顰めた。
――忘れるわけがない
僕はコクリと頷く。
忘れるわけがないのだ。僕たち三人だけの、あの冬の日のことを。
「あの約束がなくても、俺は――」
幼なじみはそれだけ言うと、僕の先を歩き始めた。

――僕だって

椿に対する気持ちは、僕も弥栄葉も幼い頃より変わらない。椿は、僕らのこの気持ちを解っているのだろうか。

「椿――」

僕はもう一度立ち止まり、瞼を閉じる。そこに映るのは、僕たち三人だけが知る、あの冬の日の情景だった。あの日、僕と弥栄葉は誓ったのだ。何に代えても椿を守ると、そう誓ったのだ。

弥栄葉に着いて歩きながら、僕はもう一度、あの鮮やかな紅を振り返った。

幼なじみと同じ名の、汚れを知らぬ純然たる紅い花は、僕らに何も語りかけてはくれなかった。

十五．絆―予―

彼女は不思議な子だった。
道端で花を愛でていたかと思うと、空を見上げてぼぅっとしていたり、反対に地面をじっと見つめていたりすることもあった。そうしているときの彼女の顔は、例外なくとても穏やかなものだった。
ある日、彼女がその小さな掌に何かとても大事そうに持って、楽しそうにしていたことがあった。
「どうしたの、椿。楽しそうだね」
僕が言うと、彼女はにこにこしながら、掌の中を見せてくれた。
「――ッ」
僕はそれを見て、思わず一歩、後ずさった。
小さな掌に収まっていたのは、数匹の蝶の幼虫だった。
「早く捨てなよ、気味が悪い」
その当時、病弱で、あまり外出をしなかった僕は、蝶を愛でたり、虫の声を聴いたりすることは好きだったが、毛虫は大の苦手だった。
「何で。捨てるなんて、かわいそうだ。朔乃、知ってるか、これが何になるのか」
出来るだけ毛虫から目を逸らしながら、蝶に決まっていると、僕は答えた。
「うん、この子たちは蝶になるんだ。この姿から、あのかわいい蝶になるんだよ。それじゃあ何で蝶は好きで、毛虫は嫌いなんだ。どちらも同じ生き物じゃないか」
当時の僕にはよく解らなかったが、今なら彼女が言わんとしたことが、何となく解るような気がする。
髪も、長いのを嫌って男の子のような短髪にしていたし、しゃべり方も同年代の女の子とは一風変わっていた。
まぁとにかく、彼女はそんな不思議な子だった。
しかし彼女を嫌う者は居なかった。寧ろ、皆、彼女のことを好い

ていた。中でも、僕と弥栄葉は特に。
僕らは暇さえあれば彼女と一緒に居た。河原で遊びもしたし、一日中鶏を見ながら過ごしていたこともあった。やはり同年の子供とは一風変わっていたが、それが僕らの形だったのだ。
そんな毎日がある日、あの寒い冬の日に、僕らの前から消えてしまうなんて、いったい誰が想像しただろう、否、彼女以外の誰にも想像なんてできなかった——
「私は要らない子供」
ある冬の晴れた日、まだ誰にも汚されていない、冷たく清廉な白を見ながら、彼女はぽつりと漏らした。
その場所を善行寺と言う。一見寂れているように見えるが、その装いは質素ながら上質。建立した者のこだわりが随所に見える。その寺の講堂に、僕らは居た。
「何でさ」
弥栄葉が驚いたように問うと、椿は少し困ったように笑った。
「椿が要らないなんて、あるはずがない」
僕が言うと、彼女はゆっくりと首を横に振った。
「父様も母様も、私には何も言わないけど、この前くちべらしの話をしてたのを聞いた」
「くちべらし」
僕と弥栄葉は顔を見合わせた。
「私はね、椿は、遠いところに行かなきゃ駄目なんだって。そうしないと、父様と母様がご飯を食べられないんだって」
「お前の親が、そんなことを言ったのか」
いきなり背後から渋い声が聞こえてきて、あわてて振り返る。
この寺が主、永斎が眉根を寄せて、しかしどこか悲しげな様子で、そこに立っていた。
その問いに、椿は軽く頷いた。その様子を見て、永斎は小さく、戯けが、と悪態をつく。
「永斎様、くちべらしって何」

僕はどこか不穏な空気に耐えきれず、永斎に問うた。しかし永斎はこの問いには答えず、じっと椿を見ていた。

「椿は“さとすぎる”から、怖いんだって」

椿は自嘲するように、ぼそりと呟いた。当時の僕には言葉の意味が解らず、椿の言っている意味が理解出来なかったが、彼女が傷ついているのだと言うことだけは痛いほど解った。

十六・絆―誓―

「さとすぎる」
何となくその言葉に引っかかりを覚えて、口の中で呟いてみる。何だか、随分冷たい印象のする言葉だと思った。
ふと、弥栄葉の方を見ると、彼は相変わらず怪訝そうな顔で、懸命に事を理解しようとしているようだった。会話の一言一言の意味を、その幼い思考でもって咀嚼している、そんな風だった。
「椿」
永斎は大きく溜息をつくと、彼女の名を呼んだ。そして、それに応じて己を見上げる、澄んだ、しかしどこまでも悲しげな瞳を真っ直ぐに見据えた。
「この世に要らぬ人間など居らぬ」
凛と放たれた言葉を聞いて、彼女は一瞬目を伏せた。しかし、
「――ありがとうございます」　次の瞬間、彼女はそう言って微笑んだ。
その笑顔に、弥栄葉と僕は息を呑んだ。彼女の見せる笑顔は、幼子が見せるそれとは思えないほど大人びていた。そしてそれは、僕らの知らない椿、いや、僕らの知らない女だった。
「椿」
永斎の溜息混じりの声で、僕らは我に返った。
「縁起、と言う言葉を知って居るか」
椿は首を軽く傾げた。
「縁起と言うのは、仏教の考え方の一つだ。この世に存在する我々は、誰しもが少なからず、互いに影響し合って生きている。物も、獣も、自然も、人間もな。例えば、お前と言う人間が今ここに居るには、お前の両親がこの世に存在する事が必要条件である事は解るな」
椿はゆっくりと頷く。

「それと同じように、今お前と話をしている儂がここに存在するには、お前という存在が必要であるし、今現在のお前と話したり遊んだり、ここへ訪れる弥栄葉や朔乃の存在にもお前という存在は必要だ。もっと広い範囲で言うと、この建物を使うと言うことを通して、お前はこの建物を建てた職人達とも繋がっていると言える。使う存在が居るからこそ、職人は者を造ることをやめない」

椿は静かに、また一つ頷いた。

「要するに縁起とは、この世に存在するあらゆるもの達の間に張り巡らされた、繋がりと言う名の網目のこと。みな繋がっているのだ。誰か一人でも欠落してしまうと網目は成り立たず、解(ほつ)れてしまう」

椿はそっと目を伏せた。

「必要ない人間なぞ、居てたまるか」

吐き捨てるような永斎の言葉に、椿は苦笑した。

「でもね、永斎様」

苦笑しながら、彼女は静かに続ける。

「父様と母様の網の目の中には、“要らない椿”の存在が必要なんだと思うの」

永斎は軽く舌打ちをした。

「父様と母様が生きるためには、やっぱり“要らない椿”が存在してないと。網目の中から消えるんじゃなくて、“要らない椿”って言う存在に成るの。そうしないと父様と母様は生きられないから」

「朔乃ッ、弥栄葉ッ」

突然己の名をぶっきらぼうに呼ばれて、二人そろってびくりと身体を震わせた。

「どうやら儂の説教も、椿には効かんらしい」

格好だけの坊主が慣れぬ事をするものではないと、永斎は苦笑した。

「椿を」

それだけ言うと、永斎はどこかへ行ってしまった。頼んだ、と目線で言われたような気がして、僕と弥栄葉は顔を見合わせた。

相変わらず、少し悲しげに雪景色を見ていた彼女の横顔を見ながら、僕らは誓ったのだ。絶対に、何に代えても、椿を守ると、僕らは、そう誓ったのだ。

――寒い冬の日、純粋な白。僕らだけの、約束の景色。

十七．廻る、廻る―始―

久々の仕事だ。腕は鈍っていないと思うし、体調も悪くはない。気が進まなくて、滅入るのもいつものこと。かつて、怯えた子供に言われたことのある“バケモノ”の称号が、仕事の前には必ず頭をよぎる。すべて、いつも通り。

ならば、この胸につっかえる不快感は何だと言うのか。言いようのない、この不快な感覚。

今日の獲物である小さな武家屋敷を、夕方の薄闇に紛れて遠目に見ながら、漠然と考える。まるで、この感覚は――

「――ッ」

椿は思わず顔をしかめて舌打ちをした。この感覚、神夜を失ったあの日と同じ感覚――

「くそっ」

短く吐き捨てるように言うと、何だか無性に腹が立って、懐の小太刀を引き抜いて地面に突き立てた。

軽い苛立ちを静めるために、深く呼吸をする。

仕事に感情は命取りだ。面をかぶるように己の感情を隠せ、敵に隙を気取られるな、俺達は戦場の神の傀儡だ、己の直感だけを信じろ、決して視覚に惑わされるな――

神夜の教えを反芻すると、かつての己の甘さが招いた最愛の人の死が脳裏に浮かんだ。忘れてはいけない。戦場での感情は命取りだ。心に刻む。

今回の仕事は、あの屋敷内の男を全て消すこと。全て、と言うところに身の危険を感じないわけではない。男相手の仕事では、やはり体格的にも不利になりやすいのだ。いつも以上に神経を研ぎ澄ましていなければならない分、体力の消耗も激しい。如何に短い時間で確実に終わらせるか、これが今回の仕事の鍵だった。

ふと自らの衣を見下ろすと、鮮やかな朱色が見えた。その毒々し

いほどに美しい色を見て、彼女は失笑した。
元々、こんな色の衣など着ていなかった。そもそも、こんなにも派手な色は命取りだ。しかし、戦場で場数を踏むにつれて、かつて着ていた麻の衣はより紅に染まっていった。気がつけば、いつからか“紅の姫”と呼ばれるようになっていた。真っ赤な鮮血で己の衣を染め上げてゆくことから付いた異名。それからだ、神夜に無理を言って紅色の着物を買ってもらったのは。
嗚呼、今日はやけに神夜のことを思い出すなァと独りごちる。これが終わったら、また彼に会いに行こうと自分に言い聞かせるように、軽く頷いた。
日が、暮れる、暮れる。
辺りはもう闇に浸食され始めていた。門前の篝火がちろちろとはぜる音だけが、静寂なその空間を満たしている。
――そろそろ、動くか
不快な感覚を払拭しきれないまま、椿は静かに立ち上がった。
瞬間、辺りを風が駆ける。ざわりと草木の擦れ合う音がして、雲の隙間から月影が覗く。
月が、妖しく微笑んでいるような気がした。

十八．廻る、廻る――動――

椿が漠然とした不快感に苛立っている頃、弥栄葉と朔乃は或る武家屋敷を目指して足を急がせていた。

その屋敷を暮野邸と言う。城下の外れに位置するその建物は、規模こそ小さいが、確かに武家屋敷の体。何となく歴史を感じさせる厳めしい雰囲気を漂わせてもいる。主を暮野貞景（くれのさだかげ）と言い、小規模ながらまとまった一族が住まっていた。

急がなければ。もうすぐ日が、暮れる。

「――ッ、弥栄葉ッ」

軽く肩で息をしながら朔乃は前方を行く友の名を呼ぶが、その背中は一向に振り返る気配がない。弥栄葉に振り返る気がないのではない、と朔乃は解っている。単に自分の声が弥栄葉に届いていないだけのことである、とも。何故なら今の弥栄葉のその瞳には、ただ一人の女しか見えていないことを知っているから。

「椿――」

焦る表情で幼なじみの名を呟く弥栄葉の声は切実。痛いほど朔乃には弥栄葉の想いが伝わってくる。

朔乃はいっそ、この身体を捨てて駆け出したかった。脆弱なこの身体のせいで、徒歩でしか移動できないことが、自身と弥栄葉を焦らせていることは、朔乃にとって明白な事実だった。

急がなければ。

その想いだけが先行して、この上もなくもどかしい。

暮野がお上に反旗を翻す。

全ては城下で囁かれる噂がきっかけだった。

元々暮野は上と、高勝と折り合いが悪いと言う噂だった。高勝は守護大名から下克上の中で成長した戦国大名で、小さいながらにも他の戦国大名の例に漏れず、国人・地侍を家臣化しながらその勢力を広げてきた。しかし暮野は地侍の中でも独立性が強く、己の指導

する村落への高勝の介入を許さず、その傘下に入ることを拒み続けてきた。
その暮野の挙兵の噂。
単なる小規模武士集団の鬱憤が爆発した、とそれだけの問題なら高勝は見向きもしないだろう。しかし問題なのは、暮野が民間から強い支持を受けていることにあった。下手に潰せば一揆が起きる。暮野は人望があると言う。ならばその人望の下に多数の援軍が参じていてもおかしくはない。そもそも決起の噂が事実であれば、あのような少人数で挑むはずがないのである。
ならば。
高勝以外の何者かが暮野を討ってしまえば良い。高勝が手出しをしなければ、暮野が何者かに討たれても、それは暮野の私怨であり、高勝は無関係を装うことが出来る。そうして指導者を失った村落を、庇護と言う名目で堂々と高勝は自領とする事が出来る。
これはまだ憶測に過ぎず、噂の域を出ないことを弥栄葉と朔乃には否定できない。
しかし、彼らにとって重要なのは、憶測でも、そこに椿が介入する余地があると言う所にあった。暮野を討つために用意される人員は、目立つことを避けるため出来るだけ少数かつ高勝から遠い人間であることが要求される。椿であれば高勝の人間でも無いし、一人で城一つ落とす程の腕がある。暮野を討つ“何者か”を椿が演じる可能性は十分にある。
生きる世界を隔ててしまった。だから、どんなに小さな糸口も逃す気は二人にはなかった。
今日、椿は現れないかもしれない。もしかしたら、噂すら真実で無い可能性もある。しかし二人は、椿が現れるまで、噂が単なる噂として終わるまで、幾晩も足を運ぶつもりで居た。もう後手に回るつもりは無い。
日が、暮れる、暮れる。
一心に進み行く二人の若者の目に映るのは、闇に浸食される武家

屋敷と――

十九．廻る、廻る――駆――

紅い閃光が駆け抜けてゆくのを、弥栄葉達は見た。突然のことに、二人の足はぴたりと歩みを止める。それは、太陽が山の向こうにその身を沈める直前の出来事だった。

「朔乃……」

呆然としたような弥栄葉の呼びかけに、朔乃もまた紅い閃光が走ったその跡を見つめながら、コクリと頷く。

「見つけた」

それは静かな、しかし紛れもない歓喜の一言。

弥栄葉ははやる気持ちを抑えきれず、閃光の軌跡を追いかけようと足を踏み出したが、それと同時に右腕に痛みを覚え、振り返る。見ると朔乃が行かせまいと腕を強く掴んでいた。

「――ッ、朔乃、お前、放」

必死で止める朔乃の手を振り切ることは、体格の差から考えても弥栄葉にとって容易いことだった。案の定少し力を込めて突き放すようにすると、朔乃の手はするりと離れた。それを機に、弥栄葉はまた屋敷の方角へと足を踏み出す。しかし、

「弥栄葉ッ」

立ち止まったのは、己を呼ぶ朔乃の声があったからではない。

「――何だよ、ありゃぁ」

朔乃の声とほぼ同時に屋敷からわき上がった、阿鼻叫喚の声と、真っ赤な――紅蓮の炎。

その紅は、毒々しいほどに紅々と、しかし美しく、艶めかしく、屋敷を包んでゆく。

二人はしばらく、ただ呆然と空の藍に溶けるように立ち上る朱を見ていた。別に炎が恐ろしい訳ではない。あの場所に行かなければならないと、己の意志が告げている。しかしそれを本能が制するのだ。今足を踏み出せば無事では戻って来られないと、そう警鐘を鳴

らす。
椿が――
椿が――
椿が――
やっと会える、やっと。
やっと、
やっと、
やっと。
最初に足を踏み出したのは朔乃だった。それに連鎖するかのように、弥栄葉もまた足を踏み出す。歩みを始めた足はもう止まることを許されず、次第に速度を速め、炎へと一心に駆け始めた。互いに競うように、ただ一心に駆ける。
屋敷に近づくにつれて、夜風に乗って流れてくる煙が、灰が、胸に充満してゆく。せき込みながら、目が痛くて涙を流しながら、二人はただひたすらに駆ける。
屋敷の門は、もう目の前だった。

※※※

「――ッ、くそッ」
弥栄葉と朔乃が屋敷に向かって走り出した頃、椿は思わぬ事態に苦戦を強いられていた。
門前の男を抜刀と同時に一太刀で斬り倒し、屋敷内に一気に踏み込んだまでは良かった。そこまでは、何の問題もなかったのだ。しかし、そこから事態は一変した。
周囲に燃えさかる炎は、今や椿の衣の色よりも更に紅々と、その

勢力を広げている。最早どこに人が居るのかも解らない。何故突如としてこのような火災が起こったのかも、火元がどこであるのかも、何に注意すればよいのかも、どこに行けばよいのかも、今は状況のいっさいが解らなかった。

それでも、椿は炎の壁に向かって駆ける足を止めはしなかった。戦場で立ち止まることは死を意味する、例え予想外の事態が己を襲ったとしても。周囲の気配に気を配りながら、椿は駆ける。

「――くッ、はッ」

煙のせいで呼吸はままならず、涙で視界はぼやけている。微かに人の気配がして、闇雲に刀を薙いだ。薙いだ先に、確かな感触。炎とは違う生温かいものが、椿の腕から肩にかける袖を濡らした。

――死ぬのだろうか

不意に過ぎる不安に、椿は自嘲した。らしくないと、己に言い聞かせる。

――落ち着け

活路は有るはずだ。こんなとき、あの人なら、神夜ならどうする。

――仕事に感情は命取りだ

迷うな、死を恐れるなと己を叱咤する

――面をかぶるように己の感情を隠せ

立ち止まり、すっと目を閉じる

――敵に隙を気取られるな

気を張りつめる

――俺達は戦場の神の傀儡だ

開いた瞳は血に狂う修羅のそれ

――己の直感だけを信じろ、決して視覚に惑わされるな

己の直感に耳を傾ける。ざわりと肌が泡立つ。

不意に風が吹いて頭上を見上げると、正面に月が見えた。夕刻に踏み込んでからそう時間は経っていないはずだから、月は酉の方角にあるはず。だとすると、進んできた方角も酉の方角と言うこと。思い出せ、この屋敷内、酉の方角には何があった。

頭に叩き込んだ図面を、思考の底から拾い上げる。
「――持仏堂」
そこに何かがある。己の直感がそう告げている。方角が解った今、この場から逃げ去ることは容易だった。しかし、己の直感がそれを許さない。
「――何か、ある」
この火災、何かおかしい、椿は呟くと真っ直ぐに月を見つめながら走っていった。

二十．廻る、廻る―怨―

そこだけふつっりと切り取られたようだと、椿は思った。
寺の本堂を縮小化したようなそれは、周囲の火が燃え移ることもなく、月明かりの下にひっそりと、その粗末な剥き出しの木板を晒していた。
一瞬、ざわりと肌が粟立つのを、椿は感じた。持仏堂の中に何か居ると、己の勘が告げる。
嫌な予感がして、冷や汗が頬をつッと撫でて行くのを感じながら、彼女は若干引きつった笑みを浮かべた。
――私は、怯えているのか
死ぬかもしれない。ならばそれでも構わないと椿は思う。どこかで捕まって打ち首になろうと、切腹を強いられようと、甘んじてそれを受けよう、己の行いを思えば当然のことなのだから、と。生を諦めているわけでも、それに飽いているわけでもなく、ただ死だけが己の進むべくしてある道なのだと。だから椿にとって死とは、生きる過程に於いての選択肢でしかない。死が怖いわけではない。しかし――
「くッ……」
逃げろと強く告げるそれは、理性ではなく本能。関わらぬ方が身のためだと訴えるのは、長年の経験ではなく己の身体。しかし退いてはならぬと己を叱咤して、椿はやっとの思いで右手に抜刀したまま持っていた刀の露を払った。既にその場での一挙一動が躊躇われる程に、辺りには殺気が立ちこめていた。
「やっと会えた」
不意に、よく通る若い男の声が響いた。
殺気が肌を刺すように刺々しくなる。
「覚えているかい、君は」
そんな言葉とともに、持仏堂の中からゆっくりと出てくる人影を

認めて、椿は無意識に刀を構える。
「僕のことを、覚えているのかな――」
人影は酷く緩慢な動きで、辺りの炎の灯りの中にその姿を晒す。
「ねェ」
椿は言葉を失った。
この屋敷の下男であろうその男は、口の端を吊り上げて妖艶に笑う。まだ幼さが残るその面立ち、忘れるわけがなかった。それは、彼女と神夜の運命を別ったあの日の――
「――五年前の、あの時の子供か」
椿が震える唇で呟くと、男は満足そうに頷いた。
「関心だね、覚えていたんだ。自身の行いを覚えておくことは、賢明なことだよ。解ってるね、この五年間ずっと、僕は君のことを想って居たんだよ」
男が一歩踏み出し、腰の物を抜いたのを見て、椿は一歩後ずさった。ちろちろと炎が映り込むそれを片手に、男は一層笑みを深める。
「想って、いた――」
椿が呟くと、男はさも愉快そうに頷いた。
「そう、想って居たんだよ。君のことをね――」
スッと男が刀を構える。
「――殺しても、殺し足りない程に」
恐怖に彩られた瞳で見るその刀身の、何と美しいことだろうと、椿は頭の隅でぼんやりとそんなことを思った。
ざわりと空間が揺れた刹那、音もなく男が大きく踏み込み、真一文字に刀を薙いだ。風を切る音がして、椿は我に返る。視界の端に、鈍く光る、美しい、刀身が――
寸でのところで椿は、男の刀を弾き、素早く後方へ身を退いた。両手に残る鈍痛に、思わず舌打ちをする。掌には、ねっとりと嫌な汗の感覚。
「――そうでなきゃいけない。僕の太刀を弾くくらい、出来なければね」

「――お前が、やったのか」
くつくつと嘲笑を浮かべる男に、椿は途切れ途切れ言葉を紡ぐ。唇はかさかさに乾いて、喋る度に血の味がした。
「何のことかな」
「火を放ったのは、お前かと訊いている」
「御名答、僕だよ」
言いながら男は、ふらりと刀を上段に構え直す。
「な――」
“何故”なんて、訊かないでよね。解らないかい、僕は舞台を用意しただけ」
「舞台――」
口の中で小さく呟きながら椿は、刀を正眼に構える。
「言っただろう、僕は君を殺しても殺し足りないんだ。この劫火の中で、焼かれて苦しめば良い。それこそ、死と生の狭間で――」
するりと灰が椿の肌を撫でて行く。彼女の背後で、何かが崩れ落ちる音がした。
「母上は、二度と帰ってはこないのだから」
男の頬に、一筋の涙が伝う。
「許さない」
半ば呻くようなその言葉は、椿の中で、五年前の記憶と、奇麗に重なった。

二十一・廻る、廻る―会―

音も無く、男は刀を振り下ろす。感情のままに振られるその太刀筋は滅茶苦茶で、椿にとって、避けることは容易かった。

しかし彼女は、一切の反撃をしなかった。男の太刀をひたすら受け流しながら、己の過去を振り返った。己の甘さが神夜を殺し、時を隔てて自分をも殺そうとしていることを、痛く感じながら。

――いっそのこと

「いっそのこと」

椿は、狂気の目で太刀をふるう男の顔を見ながら、独白する。

「血に酔う修羅に成れれば良かったのに」

――戦場に舞う、血に踊る傀儡に

男が大きく袈裟懸けに刀を振り下ろそうとするのを、椿は手元をゆるめて弾いた。男の渾身の太刀に、椿のゆるんだ手元から刀がするりと抜け落ちる。

男がそれを見逃すはずがなかった。その一瞬の隙に、真っ直ぐ刀を椿の胸に向かって突いてきた。

椿には、その太刀の動きが酷くゆっくりと感じられた。避けるつもりは無かった。ゆっくりと、目を閉じる。

――神夜

肌の近くに刃先の気配を感じて、椿は歯を食いしばった。

彼女の脳裏には、幼い日の幼なじみとの記憶、母親から捨てられた日の記憶、生家に金を届ける時の心境、神夜と過ごした日々が巡った。それらはどれも鮮やかで、途方もなく輝いて見えた。

「――捜したよ、椿」

どしゃりと目の前で何かが倒れる音と伴に聞こえたのは、彼女の名を呼ぶ声。

椿は思わず目を開けた。足元を見ると、男の持っていた刀が地面に転がっていて、柄の方に目を移すと、男自身がうつぶせに倒れて

いた。その背中には、小太刀が深々と刺さっている。
「どうした、椿」
そこでやっと彼女は、声のする方に顔を上げた。
――まさか、そんな
「弥栄葉――」
男の亡骸を足元に、幼なじみは、にこりと微笑んだ。
「弥栄葉、それは、お前が――」
「あァ、コレのこと」
弥栄葉は、ちらりと足元に目を遣ってから、そうだよ、と答えた。
「俺の椿に、やっと会えたんだ。どんな思いでお前を捜したと思ってる。十年以上の月日の中で、俺や朔乃がどれだけ苦しんだと思ってる。それを、やっと見つけたと思ったら、見ず知らずの男に殺されかけているじゃァないか。俺はなァ」
弥栄葉は、尚もその屈託のない無邪気な笑みを湛えたまま、言葉を紡ぐ。
「それだけは、どうあっても許せなかった」
椿は幼なじみの顔から目をそらした。弥栄葉の椿への想いは、彼女にはただ痛すぎて、真っ直ぐに言葉の一つ一つを受け止めることが出来なかった。
「私は――」
急に力が抜けて、椿はその場に崩れるように座り込んだ。
「神夜やあの男だけでなく」
彼女の中に溢れるのは、
「お前たちの運命までも」
逃れようのない、
「狂わせてしまった――」
自責と自信への呪いの言葉。
「私は、私はどうすれば良い。殺してしまった沢山の人の命や、狂わせてしまった月日は、もうかえって来はしないんだ――」
彼女の目に、涙はなかった。今にも泣きそうな顔をしているのに、

その目は生気が無く虚ろで、どこか遠くを見ているかのようだった。
弥栄葉はそっと、片膝をつくと、ふわりと椿を抱きしめた。ガラス細工の人形を抱くように、そっと。
「椿、ラクになりたいか」
その問に、彼女はコクリと頷く。
「全ての鎖から、解放されたいか」
彼女は、再び頷く。
彼女を包む、弥栄葉の右手が束の間、離れた。
――刹那、鈍痛。
椿は、ゆっくりと目を閉じる。背中に感じる僅かな重みが彼女に微睡みを与える。まだ開けていたいのに、弥栄葉の顔が見たいのに、瞼が重たくて、抱きしめられていて、彼の顔が見えない。
「――ごめんな、椿」
薄れゆく意識の中、彼が何故謝るのかが椿には解らなかった。ただ自分は、じきに死ぬのだと言うことだけが、はっきりと感じられた。
「こんな形でしか、お前を助けてやれなかった――」
あァ、彼は変わっていなかったと、椿は思った。純粋で、真っ直ぐで、白く汚れを知らない。あの頃から、ちっとも彼は変わらないのだと思うと、彼女は少しだけ嬉しくなって、微かに微笑んだ。ただ、もう一人の病弱で気弱な幼なじみの顔が見られないのが、酷く寂しかった。
「俺を恨むなら恨め。でも、俺は、もうお前の側から離れはしないから」
『なぁ椿、俺の罪も――この雨は、流して……くれる、だろうか』
朧気に浮かぶのは、最愛の人の言葉。
雨が降りそうに無いこの月夜に、僅か苦笑したところで、彼女の意識は途切れた。

二十二・想い

病床から這い出し、心配する家族に少し散歩をするだけだと言って、僕は家を出た。まだ足元が少しふらつくけれど、今日は、どうしても行かなければならないところがある。

永斎様の寺は、森の中を少し行ったところに在る。このふらつく足で歩く森の道々よりも、あの石段を登ることが出来るかと言うことを多少不安に思いながら、僕は見慣れた森に足を踏み入れる。そこら中に咲く、紅い椿の花が見事だった。

森の木々の間に差す、朝の光の清々しさが、酷く僕の胸を締め付けた。椿と弥栄葉が死んだあの日から、もう既に、三日が経っていた。

屋敷の方へ駆けていったあの時、門を入ってすぐ、あまりの煙の濃さに、僕は弥栄葉を見失ってしまった。彼を呼ぼうにも、煙に咽せてしまって無理だった。

煙に対して反射的に流れ出る涙を忌々しく思いながら、炎の中をさまよい歩いた。その間不思議と、屋敷の人間には出会わなかった。

ふと視界の先に、一瞬開けた場所が映った。持仏堂だろうか、その前には二人の人影。

――椿だ

そう直感した。間違える訳がない。この十数年間、あの子だけを追って生きてきたのだから。

僕は、その後ろ姿に向かって走り出した――つもりだった。

足を一歩踏み出した直後、右腕を後ろに引かれたと思った瞬間、首もと、項のあたりに重い痛みが走った。

元々体は丈夫ではない。すぐにその衝撃に導かれるようにして、僕は意識を手放したのだった。視界が閉じてゆくなかで、弥栄葉の顔をうっすらと見た気がする。いや、きっとあれは弥栄葉だった。微かに聞こえた“ごめんな”と言う一言が、今も耳について離れな

い。
その後、何があったのかを、僕は知らない。意識を取り戻したときには、既に周囲は殆ど焼け跡と化していて、朝靄の中に無数の亡骸が静かに横たわっていた。
立ち上がって辺りを見回すと、ぽっかりと開けた場所に、二人ほど横たわっているのが見えた。そしてそれが実は三人だと言うことに、僕は近付いてみて初めて気づいた。
一人は持仏堂の前の見知らぬ男。そして手前に折り重なるようにして横たわっていたのは――椿と弥栄葉だった。
椿を守るようにして、弥栄葉は彼女を抱きしめる格好で、自身の喉をかき斬って絶命していた。それを証明するかのように、彼の側にはどす黒く濡れた小太刀が、無表情に転がっていた。
僕は、事の顛末を知らない。しかし、おそらく僕の考えていることは、おおよそ、事実に符合しているだろうと思う。
多分弥栄葉は、己にできる最大限の方法で、椿を呪縛から救おうとしたのだ。白く、真っ直ぐで、純粋すぎる彼だから、こんな方法に出るしか無かったのだろう。本当に椿の事だけを考えて、彼女を救いたい一心で――
今思えば、僕と弥栄葉の椿への想いは、それぞれ全く異質な物だった。僕のそれは、間違いなく大好きで尊い、何にも代えられない宝物だった。しかし結局、僕はその程度だったのだ。弥栄葉にとって椿はきっと――己の人生、命、全てを賭けて愛し、護るべき存在だったのだ。それは時として、醜い執着に見えることもあったが、やはり彼は、どこまでも真っ直ぐだったのだ。
森の中を歩くのは、やはり少しばかりきつくて、自然と止まってしまった自身の足に苦笑する。
椿の家族には、結局何も告げなかった。きっと弥栄葉ならそうしたろうし、僕もその方が良いと思ったから。弥栄葉は元々、早くに両親を亡くしていたから、永斎様が親代わりのようなものだった。
寺に着いたら、思い切り泣こう。永斎様に何を言われようと、何

を訊かれようと、まずは思い切り泣こう。でないと、僕は、僕独りだけ、過去に取り残されてしまうから。
つッと頬に伝う汗を拭って、ふと顔を上げる。
視線の先、
「――ッ」
朝靄の中に、女が立っていた。驚いて一歩退くと、足元の小枝がぱきりと乾いた音をたてた。
女が振り返る――目が合った。
僕は、はっと小さく息を呑む。
靄に隠れてその顔は見えないが、遠く、クスリと鈴を転がすような涼しげな笑い声が聞こえた気がする。
突如鳥の羽音が静寂を破ると、その瞬間女は、くるりと身を翻し、音も無く森の奥へと溶けていってしまった。
女が立ち去った後しばらくは茫然としていたが、ふと我に返って、僕は呪縛を解かれたように息をついた。ゆっくりと瞼を閉じるとそこには、女の着ていた着物の残像が鮮やかに浮かび上がり、その光景に僕は微笑した。
手を伸ばせば届きそうなそれは、目に痛い程に鮮やかな紅色で――

終

二十二．想い（後書き）

「紅椿の姫」をここまでご閲覧いただき、有り難う御座います。

ずいぶん前に建てた構想を元に執筆したと言うこともあり、作中に描き切れていない点や余計な設定などが見受けられ、とても拙い作品となってしまいました（汗）

また、一年以上に渡る長期間の間に、私自身の文体が変わってしまい、それに伴い作品の文体もごちゃごちゃと統一感の無い物になってしまいました。大変読みづらい作品となってしまったことをこの場でお詫び申し上げます。

私自身この作品で一番重きを置いたのは、心理描写のつもりです。それはとても難しく、まだまだ私自身に未熟な点の多かった事とは思いますが、少しでも椿達の想いが読者様に伝わっていれば嬉しいです。

とても簡易なご挨拶では御座いますが、当作品をここまでご閲覧いただきました程、厚く感謝申し上げます。

ありがとうございました（＊＾―＾＊）

１０．０１．０６　天川時雨

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9293e/

紅椿の姫

2010年12月30日03時40分発行